

氏 名		岩城 薫乃
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第 43 号
学位授与年月日		令和 8 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件		学位規則第 4 条第 1 項該当者
題 目	学位論文題目	場に埋没しながら空間を拡張する表現 —秘かに存在を主張する絵画的空間について—
	研究作品題目	openest
論 文 審 査 委 員		主 査 教 授 倉地 久 副 査 教 授 高橋 信行 副 査 教 授 小西 信之 外 部 名古屋大学大学院情報学研究科 審査委員 教 授 秋庭 史典

1 学位論文の要旨

本論の基盤は、筆者の幼少期の「狭小な空間での遊び」に端を発する「同化（一体化）と分離（俯瞰）の同時発生」という特異な感覚構造にある。この経験から生じた「異空間」を、実体を伴って体験できる作品として再現する試みが、従来の二次元的な絵画とは異なる作品制作の探求を開始させた。この経緯から筆者は、「異空間」はさまざまな物や場の特徴から構成されるものとして捉え直した。これにより、それまで制作していた従来の平面による絵画を、複合的な要素を取り入れた立体作品へと変えていくこととなる。

現在の作品は、二種類の物体で構成されている。一つは棚のような外見の構造体であり、二つ目は小さなオブジェである。これらは、作品を展示する場所において、同時に組み合わせて配置される。この棚状構造体の原初は、「魅せるもの（展示物）」と「実用的なもの（非展示物）」が混在する棚に、筆者が絵画的な面白さを見出した点にある。

この絵画性とは、意図的に配置されるものと、偶発的に紛れ込んだ要素が複雑に絡み合い一体化している状態を指す。これを筆者の視点によって新たな視覚情報として再構成する手法は、構成的な絵画の作り方と類似する点があると感じたためである。この棚状の作品は、壁面に対して凸状でありながらも、空間を内包する凹状態としての視覚効果を持つ。この構造によって、幼少期の体験に導かれた「作品を場所に一体化しつつ、枠を通して空間を俯瞰的に捉える」という独自の作品構造を発見し、本研究のテーマ『「場に埋没しながら空間を拡張する表現」—秘かに存在を主張する絵画的空間について—』にたどり着いた。

本研究は、モダニズム以降の展示環境において強調されてきた作品の自律的な構造を再考し、作品と場所の相互関係が生み出す「場」による空間の拡張性を追求するものである。

「場」とは、時間と一体感を併せ持つ両義的なインスタレーション空間を指す。本論では、絵画を視覚的な表象から、体験を創出するインスタレーション空間としての「場」へと転換させる方法を論証する。転換に必要な行為は主に二つある。一つ目は、枠（構造体）による奥の景観の「切り取り」（一時的な空間の平面化）が、鑑賞者の意識の移行を促すこと。そして、二つ目は展示場所の景観と、設置した構造体が視覚的に重なり合うことによって、内

側と外側の境界が曖昧になり、鑑賞者に境界域の溶け合うさまを提示することである。この二つの認識の揺らぎを利用して、既存の物が構成要素として「絵画性を帯びたり、消えたりする」状態を喚起することにある。

本研究の最終目標は、作品を場所と切り分けることのない一体のものとして捉え、鑑賞者をも含めた「すべて」で一つの体験を作り出すことである。すなわち、作品と場所が不可分なものとなった空間に鑑賞者を取り込み、より動的な体験の創出を試みる。二つの認識の揺らぎが鑑賞者の認識に作用することで「場」が成立し、空間の拡張性が実現されることを目指す。

第一章では、絵画表現における「場所」「場所性」「場」の同異比較や過去作の「埋没」の分析と考察を主眼に置いた構成とし、第二章は、幼少期の経験から端を発した身体経験の作品化についての探求を記述している。第三章の先行例に関しては、ドローイングで空間の意味を再構築するアラン・ジョンストン、間借りを通じ生活と芸術を結ぶ村上慧など、設置場所の固有性や主張を抑えたオブジェクト配置や空間との親和的な観点の事例も、「場」と「埋没」の定義を強化する対象として取り上げている。第四章は、試作、予備審査作品の分析に重点を置き、研究テーマにある絵画性との結びつきに関する考察を述べている。

2 学位論文審査の要旨

岩城薫乃による研究『場に埋没しながら空間を拡張する表現—秘かに存在を主張する絵画的空間について—』は、美術作品が本来的に担う「主役性」を可能な限り退けつつも、なお不可避免的に立ち現れる表現の滲出（しんしゅつ）を前提とするものである。本研究は、空間に配置される創作物とその設置場所との相互関係に着目し、「場」と「埋没」という二つの概念を再定義することで、従来の枠組みに収まらない新たなインスタレーション表現の成立を試みた実験的研究である。

主役性を回避するよう巧みに構成されたオブジェクトや収集物を、設置環境の空間構成や機能と親和させながら配置することで、控えめな主張を通じて微細な変容を生み出し、既存の場を新たな意味を帯びた空間へと転換するインスタレーション表現である。特徴として、「場」と「埋没」の2つの重要なキーワードが挙げられる。「場」とは現代美術のアースワーク形式にみられる歴史、社会的、政治的メッセージと関連付けられたサイトスペシフィック(場所性)から立脚した表現を指すのではなく、自他の記憶や痕跡に起因し、芸術形式の境界が揺れ動く中で存在する領域を、主戦場とする「場」として指し示している。「埋没」とは、独自性を保ちながらも周囲と調和している状態を指し、これは作品が持つ主役の役割を極力排除してもなお立ち現れる表現の滲出を前提とした埋没性を意味している。

【論文】

論文は、序論に続き、第1章「過去の自作の考察」、第2章「『埋没』の概念と身体性の探求」、第3章「先行作品の分析」、第4章「実践と検証」の4章構成で展開され、最後に結論を置く構成となっている。

第1章「過去の自作の考察」では、3つのインスタレーション作品の分析を通して、場所への控えめな介入や記憶の喚起を手法とし、場所の固有性との相互浸透を特徴とする「埋没」という概念が抽出された。第2章では、身体尺度に基づく空間づくりを通して安心できる「居場所」を形成し、構造体が鑑賞者の動きを導くことで作家の身体的プロセスを迫体験さ

せる点を論じている。第3章の先行作品との比較では、先行作家の空間介入手法を参照しつつ、筆者の実践は「棚」や「箱」といった物質的媒介を用いて環境へと同化し、風景の一部として機能する「密かな存在感」を志向する点に特徴づけられることを明らかにしている。第4章「実践と検証」では、場所の調査に基づき作品の役割を設定し、構造体の設計・制作を経て、既存環境との統合を図ることで、場所と共鳴するインスタレーションを構築する方法論を示している。作品が場所に馴染みつつ空間認識を変容させるプロセスを分析し、構造体がもつ緩衝材・半透膜・標識といった複合的機能を明らかにしている。背板の排除による借景化や、枠取りによる平面化効果を通じて、既存環境と作品が相互に関係性を結び、光・影・構図といった絵画的要素が場所から立ち上がる仕組みが示されている。過去作品の分析から導いた「埋没」概念を軸に、身体性・先行研究・実践を多角的に統合し、作品が場所と相互作用しながら空間認識を変容させるプロセスを体系的に論じた点が高く評価できる。

【作品】

最終審査作品《openest》の再配置によるインスタレーション作品（本審査会場基礎デザイン室2）は、前景（扉）、中景（棚）、後景（窓外の景観）を視覚的に重ね合わせ、空間の絵画化の再現を試みている。本来は予備審査会場となった尾関朱傘製作所工房用に制作されているため、岩城氏の構造体を設置する理想的な空間ではないという事は考慮に入れつつ、最終審査作品と工房とのインスタレーション作品との連動性を踏まえ評価する必要がある。

本研究の特筆すべき点は、制作に用いた構造体を単なる造形的要素としてではなく、「場に埋没しながら空間を拡張する装置」として明確に位置づけ、その機能を理論と実践の両面から提示した点にある。構造体は、作品が場所に対して生じさせがちな異物感を緩和する緩衝材として機能すると同時に、半透過的な性質によって奥の空間や光、気配といった環境要素を取り込み、作品と場所の境界を曖昧にする。この二重の働きを統合的に捉えたことにより、作品が空間に溶け込みながら、鑑賞者の知覚を拡張する表現が成立している点は、本研究の大きな成果である。

制作を通じて得られた知見の中でも、インスタレーションにおける「配置」を、空間との関係性や正面性を生成する重要な行為として位置づけた点は評価に値する。とりわけ、作品の正面性を「奥の空間が透けて見える見え方」として定義し、裏表をもつ構造体によって設置条件に依存しない空間の取り込みを可能にした点は、視点の固定を前提としない新たな空間表現の可能性を示している。

以上より、本研究は絵画を単なる視覚的表現から、鑑賞者の体験を通じて立ち上がる「場」へと再定義することに成功している。今後は、奥行きや透過の仕組みをさらに発展させ、遠近法の錯覚や個人的な収集物を用いた制作を通して、「場」としての絵画表現をより深化させていくことが期待される。さらに、会場に併設された他の2作品も同様に疑似空間としての発表になるが、天板絵を見させるために机を垂直に立て壁際に配置した《寝てみること》、背板の排除が外部空間を作品内部へと統合し絵画性に繋がる正面性を生んだ《隔たりの庭》も、このテーマの強度を上げる重要な作品として位置付けられている。

【口頭発表】

口頭発表では、研究要旨の説明と論文各章の解説をベースにしながら、後半は特に論文テーマにある、場所性と絵画性を重点に口述した。

インスタレーション作品に用いた構造体を「場に埋没しながら空間を拡張する装置」として捉え、その機能と意義を明らかにした。構造体が家具的形態によって場所への異物感を緩和すると同時に、背板をもたない構造によって光や気配、奥行き空間を透過させ、作品と場所の境界を流動化させる点を考察しており、空間表現における構造体の役割を理論的に明確化した点と風景の中で静かに位置を示す標識として作用し、空間拡張の意識化を的確に説いている。

研究を通して特に重要であったのは、配置の役割である。配置は既存環境と作品の関係を規定し、正面性や空間の取り込み方を決定づける。本研究では正面性を「奥の空間が透けて見える見え方」と定義し、裏表をもつ構造体によって、設置位置に依存しない空間の取り込みが可能であることを示した。

これらの考察から、絵画を単なる視覚表現ではなく、鑑賞者の体験を生み出す「場」として再定義した点に本研究の意義がある。

以上のように、岩城薫乃はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

本研究は、インスタレーションに用いた構造体を「場に埋没しながら空間を拡張する装置」として捉え、その機能と意義を明らかにした点に特徴がある。構造体は、家具的な形態をとることで場所への異物感を和らげる緩衝材として機能すると同時に、背板を排した構造によって光や気配、奥の空間を透過させる半透膜的機能を果たす。さらに、風景の文脈を静かに指し示す標識としての機能を併せもつことで、場の広がりを示す基点として作用する。これら三つの機能が相補的に働くことにより、作品は前面に出過ぎることなく、秘かに存在を主張しながら空間を拡張する表現を成立させている。

制作を通じて得られた知見の中で特に重要なのは、インスタレーションにおける配置の役割を明確に捉え直した点である。配置は単なる設置条件ではなく、既存環境と作品を統合し、作品の正面性や空間の取り込み範囲を規定する行為であることが示された。また、本研究では正面性を「奥に広がる空間が透けて見える見え方」として定義し、掲示板のように裏表をもつ構造体を用いることで、設置位置に依存しない空間の取り込みが可能であることを示している。

これらの成果から、本研究の到達点は、絵画を単なる視覚的表象としてではなく、鑑賞者の体験を生み出す「場」として再定義した点にあると言える。構造体が半透膜として機能することで、日常的な風景は絵画的な構成へと収斂し、内と外の境界は揺らぎ、その結果、日常空間は多義的な意味を内包する「異空間としての場」へと再構成される。

今後は、本研究で得られた奥行きと透過の仕組みをさらに発展させ、遠近法の錯覚や個人的な収集物を用いた制作を通じて、普遍的な場所を「絵画」として書き換える方法論を一層深化させていくことが期待できる。

以上の点を総合し、実験的かつ挑戦的なインスタレーション作品として高度に結実させたものであり、博士後期課程の学位論文として十分な創造性・独創性・表現力を備え、あわせて口頭発表時の指摘事項についても論文への適切な反映が可能であると判断した。

最終試験において、岩城薫乃は、このような研究成果を発表し、その成績は、博士の学位を与えるに十分であった。